

閉 会 の あ い さ つ

東南アジア医学シンポジウム組織委員会委員長 東 昇

シンポジウムは、東南アジア医学の諸問題のそれぞれに関して本邦最高の権威者の集りのもとに行なわれました。全国の関係大学、病院、厚生省、海外技術協力事業団により、立体的に種々の視点から熱心に問題点が討議されたが、関与する領域の広さと深さが改めて強く認識され、一口に東南アジアというものの、東南アジア諸国の医学的事情が単一なものでないことも、このシンポジウムを通じて痛感されたのであります。

東南アジアは医学的に開発されるべき多くの問題をかかえています。わが国や欧米諸国においては、いまやその想像さえもできないような疾病が依然として常在し、住民は現代医学の進歩の恩恵に浴するところがありません。一方、住民の衛生思想、医学的常識等においても、先進諸国との間にはかなりの格差のあることは否めず、甚だしい場合には、病気にかかっているという自覚、認識すら欠くようであります。アジアの一国であるわが国が医学的にこの点に着目し、東南アジア医学開発の手をさしのべるのは当然のことといえましょう。

シンポジウム参加者は、それぞれの経験と識見とから、如何にして東南アジア医学の開発をすすめるかについてのフィロソフィーを熱情をもって吐露されました。そして、参加者に医学のみならず東南アジアを研究することの重要性を感ぜしめたのであります。

ここに第1回のシンポジウムは閉じる次第であります。これが足場となって将来引きつづき東南アジア医学シンポジウムが、さらに諸外国をも加えて、「国際東南アジア医学シンポジウム」へと発展することを祈念する次第であります。

終わりに、このシンポジウム開催にあたっては事務面担当の京都大学結核研究所寺松孝助教授のなみなみならぬ努力のあったことを記して感謝の意を表したいと思ひます。

編 集 後 記

シンポジウム・プロシーディング編集にさいし、採った方針を明らかにしておきたい。第1に、講演・総合討議のいずれも速記をとり、それをもととして講演者あるいは報告者に訂正加筆していただいた。第2に、シンポジウムのためにあらかじめ作成し、その席上配布した抄録は、だいたいそのままここに掲載した。本プロシーディングが刊行できたことを嬉しく思う。ここに、委員長東昇教授をはじめとするシンポジウム組織委員会委員、シンポジウムでの講演者・報告者はもとより、参加者のみなさまに御礼を申したい。なお、編集にさいしては、本シンポジウムの準備事務がはじまった1966年2月より、本誌刊行にいたるまで、いっさいの手伝いをしていただいた横井さんの努力に負うところが大きい。記して謝意を表する。